（一）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

この入道殿の御弟に、そのころ右大臣実雄と聞ゆる、姫君あまた持ち給へる中に、すぐれたるをらうたきものに思しかしづく。今上の女御代（にょうごだい）（注1）にいで給ふべきを、やがてそのついで、文応元年入内あるべく思しおきてたり。院にも御気色たまはり給ふ。入道殿の御孫の姫君も参り給ふべき聞えはあれど、さしもやはとおしたち給ふ。いとたけき御心なるべし。

この姫君の御兄あまたものし給ふ中のこのかみにて、中納言公宗と聞ゆる、いかなる御心かありけん、下たくけぶりにくゆりわび給ふぞ、いとほしかりける。1さるは、いとあるまじきことと思ひはなつにしも、したがはぬ心の苦しさ、おきふし、葦のねなきがちにて、御いそぎの近づくにつけても、我かの気色にてのみほれ過ぐし給ふを、大臣は又いかさまにかと苦しう思す。

初秋風けしきだちて、艶ある夕暮に、大臣渡り給ひて見給へば、姫君、薄色に女郎花などひき重ねて、几帳に少しはづれてゐ給へるさまかたち、常よりもいふよしなくあてに匂ひみちて、らうたく見え給ふ。御髪いとこちたく、五重の扇とかやを広げたらんさまして、少し色なる方にぞ見え給へど、筋こまやかに額より裾までまよふすぢなく美し。ただ人にはa げに惜しかりぬべき人がらにぞおはする。

几帳おしやりて、わざとなく拍子うちならして、御琴ひかせ奉りb給ふc。折しも中納言参り給へり。「こち」とのたまへば、うちかしこまりて、御簾の内にさぶらひd給ふさまかたち、この君しもぞ又いとめでたく、あくまでしめやかに心の底のゆかしう、そぞろに心づかひせらるるやうにて、こまやかになまめかしう、すみたるさまして、あてに美し。いとどもてしづめて、2騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり。

笛少し吹きならし給へば、雲ゐにすみのぼりて、いとおもしろし。御琴の音ほのかにらうたげなる、かきあはせの程、なかなか聞きもとめられず、涙うきぬべきを、3つれなくもてなし給ふ。撫子の露もさながらきらめきたる小袿（こうちぎ）に、御髪はこぼれかかりて、少し傾きかかり給へるかたはら目、まめやかに光を放つとはかかるをや、と見え給ふ。4よろしきをだに、人の親はいかがは見なす。ましてかくたぐひなき御有様どもなめれば、よにしらぬ心の闇にまどひ給ふも、ことわりなるべし。

十月二十二日参り給ふ儀式、これもいとめでたし。出車（いだしぐるま）（注2）十両、一の車左は大宮殿、二位中将基輔の女とぞ聞えし。二の左は春日、三位中将実平の女。右は新大納言、この新大納言は為家の女とかや聞えし。それよりも下、ましてくだくだしければむつかし。御雑仕、青柳・梅が枝・高砂・貫川といひし、この貫川を、御門忍びて御覧じて、姫宮一所出でものし給ひき。その姫宮は、末に近衛関白家基の北の政所になり給ひにき。よろづのことよりも、女御の御様かたちのめでたくおはしませば、上も思ほしつきにたり。女は十六にぞなり給ふ。御門は十二の御年なれど、いとおとなしくおよすけ給へれば、めやすき御ほどなりけり。かの下くゆる心ちにも、いと嬉しきものから、心は心として、胸のみ苦しさまされば、5忍びはつべき心ちし給はぬぞ、つひにいかになり給はんと、いとほしき。程なく后立ちありしかば、大臣心ゆきて思さるること限りなし。

（『増鏡』による）

（注1）天皇にまだ女御のいない場合、臨時に選ばれて大嘗会の禊（みそぎ）に奉仕する女官。

（注2）女房たちが簾の下から衣の袖口や裾を出して乗っている車。

問一　傍線部1「さるは」の指す内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　右大臣実雄が、娘ではなく、あえて入道殿の孫の姫君を女御に立てた猛々しい心。

ロ　右大臣実雄が、入道殿の気持ちを知りながら、あえて娘を女御に立てた猛々しい心。

ハ　右大臣実雄が、院の気持ちを知りながら、あえて娘を女御に立てた猛々しい心。

ニ　中納言公宗が、父の意に反して、入道殿の孫の姫君を恋い慕う心。

ホ　中納言公宗が、自分の妹である姫君をひそかに恋い慕う心。

問二　傍線部a「げに惜しかりぬべき」の品詞の構成として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　接続詞・形容詞・助動詞・助動詞・助動詞・助動詞
ロ　副詞・助詞・動詞・助動詞・助動詞
ハ　感嘆詞・助詞・動詞・助動詞・助動詞・助動詞
ニ　接続詞・形容詞・動詞・助動詞・助動詞・助動詞
ホ　副詞・形容詞・助動詞・助動詞

問三　傍線部b「奉り」、傍線部c「給ふ」、傍線部d「給ふ」の敬意の対象として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ（同一のものを選択してもよい）。

イ　入道殿
ロ　入道殿の孫の姫君
ハ　右大臣実雄
ニ　中納言公宗
ホ　右大臣実雄の姫君

問四　傍線部2「騒ぐ御胸を念じつつ、用意を加へ給へり」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　心の動揺を抑えて、入内の準備を進められた。
ロ　心の動揺を抑えて、姫君と合奏するための支度をされた。
ハ　心の動揺を抑えて、気持ちが外に表れないように用心された。
ニ　胸騒ぎが鎮まることを願い、入内後には幸福を得るようにと願われた。
ホ　胸騒ぎが鎮まることを願い、素晴らしい入内の儀式となるよう指示をされた。

問五　傍線部3「つれなくもてなし給ふ」、5「忍びはつべき心ちし給はぬ」の主語として最も適切なものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ（同一のものを選択してもよい）。

イ　帝
ロ　姫宮
ハ　右大臣実雄
ニ　中納言公宗
ホ　右大臣実雄の姫君

問六　傍線部4「よろしきをだに、人の親はいかがは見なす」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　世間並みの娘でさえ、親はよい方だと思いがちである。
ロ　良家の娘でさえ、親は将来の心配が絶えないものである。
ハ　良家の娘でさえ、他人の親からあら捜しをされるものである。
ニ　性格のよい娘でさえ、親はその美しさをも気に掛けるのである。
ホ　世間並みの娘でさえ、他人の親から見ればうらやましいのである。

問七　本文の内容と合致するものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　右大臣実雄の姫君は、帝よりも年上で、帝にはほかに好きな女性もいたので、二人の仲はよくなかった。
ロ　右大臣実雄の姫君は、中納言公宗の心中を察していたが、父の命であるのでどうしようもなかった。
ハ　右大臣実雄の姫君は、ほかの女性たちと争って女御となることに、強い不安を抱いていた。
ニ　右大臣実雄は、中納言公宗の悩む様子を垣間見て、どうしたものかと憂いていた。
ホ　右大臣実雄は、姫君が実は中納言公宗に好意を持っていることを知っていた。

（二）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

長安ノ豪民郭行先、有ニ女子紹蘭一。適ニ巨商任宗一、為ニ賈於湘中一。数年不レ帰、復 A 信不レ達。紹蘭目下睹堂中有ニ双燕一戯中ルヲ於梁間上一。蘭長吁而語ニ於燕一曰、「我聞燕子自ニ海東一来、往復必ズ経ニ由於湘中一。我婿離レ家、不レ帰数歳、蔑レ有ニ A 耗一。生死存亡、弗レ可レ知ル也。B 欲憑爾付書、投於我婿。」言訖涙下ル。燕子飛ニ鳴シテ上下一、似レ有レ所レ諾。蘭復ビ問ヒテ曰、C「爾若相允、当泊我懐中。」燕遂ニ飛ブ於膝上一。蘭遂ニ吟ジテ詩一首ヲ云、「我婿去リテ重湖ニ臨ンデ窓ニ泣血書ス。D 殷勤憑燕翼、寄与薄情夫。」蘭遂ニ小ニ書シテ其字ヲ、繋ギテ於足上一。燕遂ニ飛鳴シテ而去ル。任宗時ニ在リ荊州ニ一。忽チ見ル一燕ノ飛ニ鳴スルヲ於頭上一。宗訝シミテ視レ之ヲ、燕遂ニ泊ル於肩上一。見レ有ルヲ一ノ小ナル封書一。繋ギテ在ル足上一。宗解キテ而視レ之ヲ、乃チ妻ノ所レ寄スルノ之ナリ詩一。宗感ジテ而泣ミダス下ル。燕復ビ飛鳴シテ而去ル。宗次年帰リ、首ハジメニ出シテ詩ヲ示レ蘭ニ。E 後文士張説伝ニ其事一、而好事者写レ之。

（王仁裕『開元天宝遺事』による）

注　郭行先……人名。　紹蘭……郭行先の娘の名。　任宗……人名。　湘中……現在の湖南省に相当する地域。
長吁……「吁」は、なげくの意。　燕子……燕の意。　允……ゆるす。　重湖……「湘中」にある湖。
荊州……現在の湖北省に相当する地域。　張説……人名。

問八　二つの空欄 A に入る漢字一字として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　綿　　ロ　簡　　ハ　音　　ニ　息　　ホ　竹

問九　傍線部B「欲憑爾付書、投於我婿。」とあるが、紹蘭が特に「爾」を選んだのはなぜか。その理由として最も適切な箇所を問題文の中から抜き出し、その初めの漢字**二字**を記述解答用紙の**問九**の欄に記入せよ。

問十　傍線部C「爾若相允、当泊我懐中。」の書き下し文（全文ひらがな書きとする）として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　なんぢあひゆるすにしかば、がくわいのうちにとまるにあてん。
ロ　なんぢもしあひゆるさば、まさにわがくわいちゆうにとまるべし。
ハ　なんぢあひゆるすがごとくんば、わがくわいのうちにあたりとまれ。
ニ　なんぢのごときものあひゆるし、わがくわいちゆうにあててとまらん。
ホ　なんぢわかくしてあひゆるされば、まさにがくわいのうちにとまるべし。

問十一　傍線部D「殷勤憑燕翼、寄与薄情夫。」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　ひたすら燕の翼を頼りにして、薄情な夫の消息を知りたい。
ロ　何とか燕の翼にすがって、薄情な夫をわが手に取り戻したい。
ハ　否が応でも燕の翼に取り憑いて、薄情な夫に恨みを伝えたい。
ニ　しっかりと燕の翼に託して、薄情な夫のもとに手紙を届けたい。
ホ　ぜひとも燕の翼を借りて、薄情な夫へ自分の涙を送り付けたい。

問十二　傍線部E「後文士張説伝二其事、而好事者写レ之。」とあるが、「其の事を伝へ」「之を写す」と記されるほどに興味をもたれた理由として最も適切と考えられるものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　古く漢の武帝の使節として匈奴に捕らわれた蘇武にまつわる「雁書」の話題に似て、燕は機転を利かせ、家族の困窮を薄情な夫に知らせて、即座に帰郷させたから。
ロ　古く漢の武帝の使節として匈奴に捕らわれた蘇武にまつわる「雁書」の話題に似て、燕が妻の思いを吐露した詩を届けて、いぶかる夫に向かって熱心に返歌を促したから。
ハ　古く漢の武帝の使節として匈奴に捕らわれた蘇武にまつわる「雁書」の話題に似て、帰らぬ夫への不平不満を綴った書を燕が届けたことで、妻の積年の思いが解消されたから。
ニ　古く漢の武帝の使節として匈奴に捕らわれた蘇武にまつわる「雁書」の話題に似て、燕が妻の頼み通りに夫のもとへ飛んで行き、涙ながらに帰郷を訴え、夫婦を再会させたから。
ホ　古く漢の武帝の使節として匈奴に捕らわれた蘇武にまつわる「雁書」の話題に似て、燕が夫のもとへ飛んで行き、妻の託した言葉を伝え、夫婦の再会に重要な役割を果たしたから。

（三）次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

野生の熊に出くわしたことがあるでしょうか？　私は二度ほどあります。一度はカナダのブリティッシュ・コロンビア州の東のはずれ、初秋の色づきはじめたグリフィン山麓のA キョウコクの道を車で走っていたときのことで、谷の反対側の斜面に大きなアメリカグマ（ブラック・ベア）が二頭、いきなり出現してこちらをじっと凝視しました。車を道端に停め、おそるおそる外に出たのですが、自らのテリトリーを睥睨（へいげい）する原生の森の主のようなその姿の勇壮さに釘付けになったことをよく覚えています。もう一度は北海道、旧夕張炭鉱の廃坑が点在する奥まった山道を歩いていたときです。夏草が生い茂る藪（やぶ）のなかからガサゴソと音がした方を見ると、それは子連れのヒグマで、このときは立ち去ってゆく後ろ姿だけが見えたのですが、それでもあたりの空気が生々しく香り立つような野生の気配を感じ、しばらくのあいだ言葉が出ませんでした。その瞬間の感情は、恐ろしい獣への畏怖というよりは、むしろ不思議な昂（たか）ぶりのような感覚というべきでしょうか。そのとき私の身体は、自らが失ってしまった「野生」との繋がりを深い記憶の底からさぐりだし、かつてありえた森羅万象との「一体化」の夢を、熊に託していたのかもしれません。自然のもっとも奥深くに生息して人間社会との接触を避けつづけてきた熊は、世俗の言葉では説明できない、人間の本源的な感覚意識の重要な部分に触れてくる、特別の喚起力をもった生き物なのです。

近年、人里に現われる熊の数が増え、人と熊との遭遇は決して珍しい出来事ではなくなりました。野生生物の生息域である奥山と人間が往き来してきた里山との関係が大きく変わったことが、一つの原因だといわれています。冬眠前に多くの食物を摂取したい熊にとって、放置された里山の薪炭林（しんたんりん）が豊富に落とすクヌギやコナラの実が格好の餌になっているようなのです。炭焼きや伐採など里山を生業の場としていた人間たちが消え、人の気配がなくなった中山間地域（平野の外縁部から山間地にかけての領域）に警戒心を解いた熊が出入りするようになっているのです。そうした場所にキノコ採りなどで人が入れば、熊と遭遇する確率は高まります。襲われて死亡する事故も起こっています。こうして熊は、いまや人間社会にとっての「害獣」として認識されるようにさえなってしまいました。

a

しかし、熊という存在が人間に向けて発していた精妙なメッセージ、そこから人間がくみとってきた深い叡（えい）知までをも私たちが捨て去ることはできません。広域的な環境を分け合って生きてきた熊とは、人間にとってどのような存在だったのか。熊は私たちに何を語りつづけてきたのか。熊から人は何を学んできたのか。これらの問いは、いまこそ考えてみるB に足るカキュウの問いであるように私には思われます。人間が、おのれの自然的存在の根源について思考しようとしたときに現われるものが熊であったとすれば、3 熊を害獣として、あるいは危険生物として撃退するような発想は、人間という存在の本質をも否定してしまうことにつながりかねないからです。

ウィリアム・フォークナー（注1）に「熊」という小説があります。この作品は一読すると、一九世紀の後半、ミシシッピ・デルタ（注2）の周囲に広がる野生の森に畏怖の念とともに入り込んで熊や鹿を狩る入植者たちをめぐる、陰翳（えい）ある美しい狩猟物語に見えます。けれど、主人公の少年アイクに狩猟の技を教えるインディアンの血が混じった老黒人サム・ファーザーズの叡知ある姿が、特別にきわだった印象を残します。彼はいったい何者なのか？　そして、彼らが仕留めようとしている「オールド・ベン」と名づけられた不死身の大熊とは、動物以上のなにかもっと大きなものを象徴しているのではないか？　読者はきっとすぐに、フォークナーが仕掛けた物語の細部の謎めいた綾（あや）が、錯綜（そう）した糸のように絡みはじめるのを感じることでしょう。これは、狩猟を通じて行われる一人の若者の精神形成を描いた、謙虚さと勇気の獲得をめぐる「教養小説（ビルドゥングスロマン）」（注3）の姿をとっていますが、ほんとうは野生動物と人間とのあいだの深い交感と厳格な掟をめぐる哲学的な主題を持った作品なのではないか？　この見えざる自然の理法に従おうとするかのように、主人公アイクは、銃も持たず、すべての道具を捨てて身ひとつでオールド・ベンに挑むことで、この幻の熊とはじめて出遭うことができます。そして不思議なことに、その深い交感の地平において、銃を持たない人間を大熊は決して襲わないのです。

森の掟を知り尽くしたサム・ファーザーズの教えのもとで、「　b　」を撃つことではなく、過去から伝えられた自然という大いなる「　c　」を受けとめようとするアイク。こうして少年は、近代的な搾取者としての猟師であることから離れ、より深い自然との融合の場へと参入していくのです。けれども入植者たちはついに、不死身に見えたオールド・ベンを仕留めることに成功します。そして大熊の死を見とどけたとき、森の叡知とともに生きてきた

偉大な狩人サム・ファーザーズもまた、自らの命脈がつきたことを悟り、熊を仕留めた無鉄砲な混血児ブーンに、彼自身の命を絶たせるのです。

熊が死ぬと人も死ぬ。それはつまり、原生林の掟の中で生きる生命すべてが、連続した一つの命脈によってつながっていることを示唆しています。人間一人一人の資質としての謙虚さや勇敢さといったものもまた、そうした自他融合のなかの高次の理法を知ることのなかから生まれるものであって、決して個人的な所有物ではないこと。知らず知らず人間中心主義に染まった道徳観念を打ち立ててしまった私たちにたいし、サム・ファーザーズの最後の教えは、アイクの啓示を通じて、一つの大きな発見を与えてくれるのです。

フォークナーは、「熊」という物語が、この太古からの自然の摂理、この「森の掟」についての物語にほかならないことを、こんなふうに暗示的に書いています。

男たち――白人でも、黒人でも、赤色インディアンでもないただの男たち、忍耐する意志と剛毅さをもち、生きながらえる謙譲さと術をもった猟師たちについての話、そして、その話に並べられて浮き彫りにされる犬や熊や鹿の話――荒野によって荒野のなかに秩序づけられ強いられながら、いっさいの悔恨をも無効にし、いかなる慈悲をも受けつけぬ、大昔からの和らげるすべとてない規律に従って、大昔からの休む暇もない争いに従っているけものたちの話だ（……）

（フォークナー「熊」『フォークナー全集　16　行け、モーセ』大橋健三郎訳、冨山房、一九七三、二一三―二一四頁）

フォークナー特有の、晦渋で含みある語りとはいえ、こうした部分には、巨大な野生の熊、すなわち斧と鋤と銃とを持った人間による近代の搾取的な論理にいまだからめとられない、大森林よりもさらに大きな存在、すなわち「古の野生」そのものの不可侵にして深遠な存在が、暗示されています。しかし処女林は犯され、原生の森もまた「時代錯誤」というべき人間たちの長年にわたる所業によって侵略されつづけ、野生の熊は「破砕と破壊の回廊」（フォークナー）のなかを凶暴な獣として駆け抜けるほかなかったのです。アイク少年は、少年であるからこそ、いまだ自覚的には知りえないこの破壊の歴史を、インディアンと黒人という虐げられた者たちが持つ深い叡知を通じて、自らの内面においてすでに抱きとっていたのでした。[4]フォークナーが「熊」で描こうとした真のものは、この、無垢の心の深層において見ぬかれ、抱きとめられた「野生」の掟の、残照ともいうべき輝きでした。

（今福龍太『宮沢賢治　デクノボーの叡知』による）

（注1）ウィリアム・フォークナー（一八九七―一九六二）……アメリカの小説家。
（注2）ミシシッピ・デルタ……アメリカのミシシッピ川下流の地域。
（注3）教養小説……主人公の成長や人間形成を主題とした小説。

問十三　傍線部A・Bにあてはまる漢字**二字**を、それぞれ記述解答用紙の**問十三**の欄に楷書で記入せよ。

問十四　傍線部1「釘付けになった」とあるが、ここでの意味とほぼ同じ意味となる語句を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　胆を冷やした
ロ　目を奪われた
ハ　足がすくんだ
ニ　腰を抜かした
ホ　胸に刻んだ

問十五　傍線部2「不思議な昂ぶりのような感覚」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　人間の社会から遠く離れ、森や大地の恵みと共に生きる「野生の熊」たちの姿を目の当たりにしたことで、自分もそうありたいというあこがれの気持ちをかき立てられた、ということ。

ロ　目の前を立ち去っていく「野生の熊」の姿に驚きながらも、自分の中の深いところに、文明化する以前の人間の生の痕跡があることを実感し、言い知れぬ喜びがこみ上げてきた、ということ。

ハ　かつては信仰の対象ともなっていた「野生の熊」の存在を身近に感じたことで、森の中で生きていたころに培った根源的な感覚が呼び起こされ、満ち足りた思いを感じていた、ということ。

ニ　恐れることなく人間を見つめ返す「野生の熊」のふてぶてしさにたじろぎながらも、その「熊」に立ち向かうために、身体の内奥から湧き出る勇気と生命力を感じ取っていた、ということ。

ホ　人里離れた奥深い山中をわがもの顔に闊歩する「野生の熊」の荒々しい様子に心を打たれ、自然と一体化した暮らしを取りもどすことの意義を実感することができた、ということ。

問十六　空欄 a にあてはまる語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　野生動物との深い共棲の関係

ロ　都市と農村との住み分けの関係

ハ　森のもたらす恩恵に依存する関係

ニ　自然を一方的に搾取する関係

ホ　信仰と文化との調和的な関係

問十七　傍線部3「熊を害獣として、あるいは危険生物として撃退するような発想は、人間という存在の本質をも否定してしまうことにつながりかねない」とあるが、本文における人間と熊との関係の説明として**適切でない**ものを次の中から**二つ**選び、解答欄にマークせよ。

イ　かつて野生の熊たちは、その威厳に満ちたありようから、「森の主」として、人間を含む生き物たちの前に君臨し、恐れられた存在だった。

ロ　森の奥深くで生きる熊たちは、めったに人前に姿を現わさないことで、人知を超えた自然の神秘的な力を象徴する存在だと考えられてきた。

ハ　自然と共に生きていた人々は、熊という存在を媒介としながら、厳しい環境の中で生き抜くための知恵と心構えを、自分たちなりに学びとってきた。

ニ　近年になって、山間部の奥地にまで人間の開発の手が伸びたことで、熊たちは本来の生息地を奪われ、人里近くにまで出没するようになった。

ホ　餌を求めて里山に現われる熊と人間が不用意に接触する機会が増えたことで、熊は、人間を脅かす危険な動物と見なされるようになった。

問十八　空欄 b と空欄 c にあてはまる語の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　b　動物　c　資源

ロ　b　標的　c　負債

ハ　b　文明　c　精神

ニ　b　獲物　c　遺産

ホ　b　大地　c　記憶

問十九　傍線部**4**「フォークナーが「熊」で描こうとした真のもの」とあるが、筆者の考えの説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　少年「アイク」が、「サム・ファーザーズ」の教えに従い、たった一人で「オールド・ベン」に立ち向かっていく様子を描くことで、人間にとっての真の勇気とは何かを伝えようとした、ということ。

ロ　不死身の大熊「オールド・ベン」を、他ならぬ自らの手で葬り去ろうと決意していた「サム・ファーザーズ」の無念を描くことで、人間と動物との間にも深い交感が可能だと示そうとした、ということ。

ハ　近代文明との戦いに敗れ去っていく「オールド・ベン」の姿を見つめる「サム・ファーザーズ」の哀しみを描くことで、自然に対する畏れと謙虚さを忘却していく人間の姿を告発しようとした、ということ。

ニ　少年「アイク」の視点から、森を切り開き、自然と共に生きる世界を作り上げてきた先駆者たちの労苦を描くことで、近代化の中で失われてしまった人間の本質を読者に想起させようとした、ということ。

ホ　少年「アイク」が、「森の掟」を知る存在としての「サム・ファーザーズ」の死を受けとめていくさまを描くことで、野生の中で生きる術を決定的に失った人間の悲劇が象徴的に表現された、ということ。

問二十　問題文の構成や表現の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　文章の前半部では、自然環境に関する一般的な理解を否定する根拠として、筆者の経験を踏まえた発見がていねいに説明されている。

ロ　筆者の実体験に触れた前半部を、フォークナーの作品を論じた後半部で批判することにより、文学を手がかりとする思考の現代的意義を強調している。

ハ　文章の後半部では、筆者が自分の問題意識に見合った言葉を模索する中で、表現を工夫しながら思考を深めていくさまを確認することができる。

ニ　個々の段落どうしの論理的な整合性よりも、文学的な想像力の広がりの方を優先することで、読者の内的な感覚に働きかける文体となっている。

ホ　文章全体を通じて、過去の人々が動物に託して述べてきた思想がたどり直されることで、読者に現代文明の危機の深さを印象づけようとしている。

（四）以下に示すのは、ドイツの思想家テオドール・アドルノ（一九〇三－一九六九）がナチに祖国を追われ、亡命先のアメリカで『ミニマ・モラリア』を執筆していた一九四四年が、アドルノ自身にとって「ただならぬ結晶」の時期だったとする筆者・藤田省三の文章の一節である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

亡命生活という生活形式は一般的に言って私たち日本人の経験の中にありにくいものであるが、そこに発生する根本的な問題は、要するに、異文化の真只中で負い目を負った異物として生活するということにある。自分を自分として育成した文化から離れてそれとは全く異った文化の中で、したがってほぼ完全な孤独の中で、しかも独力では何一つ出来ない環境において――すなわち自分自身の持っている生活・文化・行動の諸能力からさえも孤独である環境の中で――、異文化の世話になることによってやっと生物学的に暮らすことが出来るという生活状況が亡命生活の中心に存在する。

ここで異文化というのはもちろん芸術や学問などという文化の蒸溜物を指して言っているのではない。そうではなくてアドルノの一句を借りれば生活の「度量衡」に関することなのである。単に言語が違うとか食い物が違うとか地理をよく知らないとか社会組織や制度の細部について無知であるとか、総じて言えばそういう生活に不便をもたらすものだけが異文化の異文化たる所以ではない。生活全体の中に滲みわたっている感度の高い「衡（はかり）」がまるで違うのが異文化なのである。だから、言葉がいくら分かっていても、交通機関にどれだけ精通していても、社会の諸制度についてどれほど十分に知っていても、そもそも自由な生活というものの持つ円滑さにとって必須であるところの或る触覚を欠いているのであって、そのため水を失った魚と同じくすべてについて自然さを欠かないわけにはいかない。同じ事をしても微妙なタイミングがずれていてそのため人工的で作為的な行動様式を呈せざるをえない。というような全体的に異質感を生じさせるものが異文化なのである。観光客や留学生ならばその異質感が却て珍らしさの源泉ともなり、自分の社会的根の持つ重苦しさからの解放感の素ともなるのであるけれども亡命者にとってはそうではない。[1]彼は、触覚の働かない、物指しの違うその異文化の中で常に全（あら）ゆる場所で全ての事柄についてヘマを仕出かす以外に生きる道はないのである。そのヘマを自ら慰んでいるような余裕は彼には与えられていない。そしてそのヘマばかり仕出かす存在としての彼が生きていけるのは、他ならぬその異文化の許容量のお蔭なのである。その場合には通常その異文化社会の中の配慮ある者が個人的仲介者として現われていることであろう。異文化の「お蔭」はその時人格的体現の形においても現われる。負い目は社会的空気の許容量に対してと個人的配慮の恩義に対してと二つの層で働かざるをえない。こうして自分の文化から切り離された亡命者の孤独は、決して孤独それ自体に閉じ籠もって自足的に完結することを許されず、否応なしに違和感に満ちた他者の御厄介にならなければならないような、そういう孤独なのである。かくて孤独は自らを癒やす閑と場所を持たないで毎日違和感の中で拡大再生産され、したがって違和感の方も又毎日毎日新しい種を得て蓄積されていくことになる。しょっちゅう繰り返す自分のヘマは屈辱感を堪え難く増大させ、許容と恩恵によって辛うじて暮らせるところから来る負い目の感覚は最小限の矜持（きょう）まで完膚ない程に打ち砕きかねないであろう。

どんな亡命者も異文化の中で異物として生きる以上今述べた関連を否応なく経験するであろうが、しかしアドルノや彼の仲間達はその経験を直接経験の中にだけとどめて置いてはならない者であった。彼らは「認識」に生きる者であり、しかも彼らの「認識」たるやそれが彼らにとって殆ど唯一の誠実な「プラクシス（実践）」である程にまで包括的な意味を持つものであった。[2]認識こそが最も誠実な実践である時、実践性を保証するものは認識への誠実な徹底以外にはないことになる。その意味で彼らは普通に言われる意味とは逆の意味で――すなわち実践への熱意を認識へと注入し尽す者という意味で――全（まった）き実践的学者であった。そういう者でありうるためにこそ彼らは、ワイマール時代以来、伝統的な形而上学的哲学のすべてに批判的態度をとり、深く取り入れたマルクス主義に対してさえも批判的吟味の眼を働かせ、自らの理論を含めた全ての文化諸形式に対して批判的対話を行ないながら、「真理」がそこにだけ現われるであろうと考えられた、諸範疇の相せめぎ合う「力の場」――「個別性」と「一般性」、「主観的なるもの」と「客観的なるもの」、「内在すること」と「外在すること」、「理解」と「批評」、「限界」と「越境」等々が格闘し合う「力の場」に迫って、その内的構造を明かにしようと努力して来たのであった。全てを何か一つのものに吸収還元して簡単な「実践綱領」を作りそこから熱中的「実践」を抽（ひ）き出して来る態度とは違って、彼らは、そういう相互的にせめぎ合う「力の場」の真なる姿を突き止めようとして一つ一つのものに対しては全て批判的に吟味する理論上の訓練を行なって来たのであった。

そしてそれこそが、カント的な「限界の指摘」を中心とする批判理論を超えた二十世紀的「批判の理論」としての新しい「社会哲学」の誕生なのであった。

その彼らにとって異文化の中での異物としての生活は何を意味せざるをえないであろうか。先程見た亡命生活そのものの持つ一連の問題の他に、彼らの包括的な「認識活動」にとって最も重要な動力源が切除されるという危機に彼らは遭遇しなければならなくなるのであった。[3]認識が、部分検査ではなくて、諸範疇のせめぎ合う「力の場」の解剖であり、そこに自らの実践性の保証が懸かった包括的なものであればある程、それは情熱やもろもろの「衝動」から切り離し難いものとなる、というそのことは例えばヘーゲルにおける「激情」と「理性」の結びつきを想起しただけで十分分かる筈である。そうしてその点ではアドルノたちはヘーゲル的思考系列に属していた。アドルノの言葉で言えば「客観化」という冷然たる思考の働きでさえも、それは「衝動によって養われている」のであった。すなわち一般的に言えば、「認識がそこから動力を引き出している」水源地は様々な「願い」やら「愛情」やら色々な「不安」やらの「衝動」の中に在るのだ。例えば――とアドルノは言う――、「記憶」という一つの対象化された思考の素材的形態にしても、それは「消滅していくものを何とかして繋ぎとめようとする愛情の念」と切り離すことの出来ないものなのである。そのものが滅び去っていくことへの不安、そのものが留どまって居てくれることを望む願いがその際の「愛情」の中には含まれている。そういう動的な精神的要素が「記憶」という思考の材料倉庫の如き静的な精神形式の底にさえ宿っているのである。こうした「衝動」の複合体が全ゆる思惟形式の根っ子において働いている。そして自分を育成した文化（生活様式）は同時にそういう「衝動」の母なる大地に他ならない。そこから切り離されて、全てのものが全き他者であるような条件の中に置かれたとき衝動の複合体は極度に単純化される。取り引きとか交渉とかの元となる利害衝動や与えられる同情への単純な謝意や社交道徳上の思いやり等々へと縮小するであろう。

亡命生活の中で生ずる「母国語」喪失の問題もそれ自体として問題化するのではなくて今述べた「衝動」の母なる大地の喪失と分かち難く結びついて出て来るもの――もっと言えばその構成分子の一環として出て来るもの――に他ならない。言語それ自体が認識活動における特別かつ独立の実態なのではない。この点への顧慮は多少とも大切であろう。その顧慮を欠くと、言葉をそれ自体として取り出してその意味で独立化して考察する言語学の折角の有益な業績も無分別に振り廻されて言語実体化の弊害をもたらすことになりかねないであろうし、又しばしば見られるように亡命生活の問題を言葉の問題だけに還元して了おうとする態度もそこに現われることであろう。「外国語ベラベラの認識力ゼロ」という人種が群生する現象の中に隠されているのも、こうした衝動の大地と言葉との間の不可分の有機性に対する無感覚である、と言ってよいであろう。たしかに言葉は認識活動の中においても衝動の根っ子にだけ関係しているものではない。一般性を獲得した抽象的認識の最終的表現形式においても言葉は同じような重要さをもって働いている。けれどもにもかかわらず、それ自体で完結している独立の実体なのではない。だから、「認識」に生きる者が異文化の中に異物として亡命生活を送る時生ずる言語障害は単なる外国語習得上の問題なのではない。第一アドルノたちにとってアメリカ語の習得などは――私たちとは違って――何程のことでもなかった筈である。其処で起こる「母国語を剥奪された」という感じは、認識活動の動力源としての「衝動」の大地と、思考法の土台としての理論的伝統と、それらの複合体から根こぎにされたという感覚の言語平面における現われに他ならない。問題はどこまでも、「衝動の地盤」と絡み合った「母国語」文化から追放されてあるという事の中に在った。そうしてアドルノは思考法の伝統のみならずこの「衝動」の地盤をも含めて「認識の歴史的次元」と呼んだのであった。そこでは「歴史」は唯の時間系列における過去なのではない。[4]そこから認識を発生させ、そこにおいて認識の活動を生き生きと支えている縦の社会文化的根源が「歴史」なのである。純粋に過去のものもむろん含まれるであろう。しかしその場合にも私たちの認識活動に対して今述べたような「地盤」としての働きを持っているものが「歴史」なのである。彼らがアメリカでの亡命生活の中でいやという程感じ取ったものはその「認識の歴史的次元」の喪失感であった。もし、それを指して、彼らが乗り越え得なかった「文化的障壁」という風に呼んで澄ましているような理解の仕方が在るとすればそういう態度は私の好むところではない。現にアドルノはそういう用語を受け入れることなく「認識の歴史的次元」と呼ぶことによって今述べた重層的なるものの意味を深々と掘り当てようとしているのではないか。そうする時に始めて喪失感それ自体が却て認識すべき世界を深く拡大し、認識の活動を一層推し進めるのである。逆説的な「衝動の地盤」がここに更めて発生する筈である。その新たな「地盤」はもはや直接的な母なる大地ではなくてむしろそれの喪失感を逆に「地盤」とし直すところの、すばらしく力動的な「地盤」なのである。認識者の土壇場の健全さが此処にある。かつてガリレオ・ガリレイが地動説の発[5]

見に際して「これからは勇気をもって宙ぶらりんで生きるんだ」ともし本当に言ったのだとしたら、それに類する相似形の――規模こそ少々小さいが――内的経験がこの時のアドルノになかったとは言えない。亡命生活の精神的「結晶」と先に言った事象はその芯について言うならばこの事を言う。それと比較する時「文化的境界」を口にしながら技術に乗って簡単にそれを「乗り越えて歩く」幸福な文化的拡大主義がいかに平面的な思考であるか思い半ばに過ぎる筈である。

（藤田省三『精神史的考察』による）

問二十一　傍線部1「彼は、触覚の働かない、物指しの違うその異文化の中で常に全ゆる場所で全ての事柄についてヘマを仕出かす以外に生きる道はないのである」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　たとえ他の人と同じように行動したとしても、そもそも亡命先の社会においては生活全般の中で長さや重さの衡かり方が違うなど、基準が異なるため、自分としては正しく振舞っていても、正しいとは認識してもらえず失敗を繰り返すということ。

ロ　たとえ他の人と同じように行動したとしても、各個人の感覚のあり方はその人が育ってきた文化の中で形成されるため、特に触覚のような微妙な感覚の働かせ方が必要になる領域においては、どうしても異文化の中ではずれが生じて途惑ってしまうということ。

ハ　たとえ他の人と同じように行動したとしても、亡命先ではそうした行動に対する感覚や経験の裏づけがないために、どうしても不自然なところが残ってしまい、そうした不自然さを無視してすますことも払拭することもできないまま、疎外感を覚えるということ。

ニ　たとえ他の人と同じように行動したとしても、亡命者として異文化の中にあるということは自由を制限されることを意味し、いくら自然に振舞っているつもりでもどこか意図的に見えてしまうため、自分の真意が伝わらない相手を前にして窮してしまうということ。

ホ　たとえ他の人と同じように行動したとしても、亡命者の場合、結局は亡命先の社会の人々に許容されて存在しているという負い目の感覚が消え去ることはなく、そのために自分の孤独感を率直に表現できず、意思疎通に失敗して孤立を深めざるをえないということ。

問二十二　傍線部2「認識こそが最も誠実な実践である時、実践性を保証するものは認識への誠実な徹底以外にはないことになる」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　行為を通じて社会を変革しようとする実践は、変革対象に関する認識を必要とするが、実践から疎外された者にとっては、あらゆる理論的営為と批判的に対峙する中で、主観か客観か、個別か普遍か、内在か外在か等、諸範疇のいずれか一方に、真理を帰着させる安易な還元主義を排し、相対立する諸範疇間の内的構造を包括的に把握する認識に従事すること自体が実践性を持つのだ、ということ。

ロ　行為を通じて社会を変革しようとする実践は、変革対象に関する認識が提供する行動指針に従って遂行されねばならないが、亡命生活を余儀なくされている状況にあっては、他者の厄介にならなければ生活すらなり立たない中で、実践に関与することは極めて困難であるため、変革対象の社会構造に関する認識に徹することにより実践へ寄与することが誠実な態度に他ならない、ということ。

ハ　行為を通じて社会を変革しようとする実践は、「衝動」の母なる大地に突き動かされてこそ成就するが、亡命生活により、「衝動」の大地と、思考法の土台としての理論的伝統と、それらの複合体から根こぎにされたという喪失感の中で、逆説的な「衝動の地盤」が生じ、これがかつての地盤にとらわれることのない自由で創造的な実践を生み出し、包括的な認識を導くことになった、ということ。

ニ　行為を通じて社会を変革しようとする実践は、認識の裏付けを必要とするが、実践の対象構造を経済あるいは政治構造といった単一の領域に還元し、そこから実践を鼓舞するわかりやすい認識を提供するのではなく、たとえ理解が困難なほど高度に複雑化された理論であっても、実践を正しく導くことのできる認識を提供することこそが、認識に従事する者の誠実な態度だ、ということ。

ホ　行為を通じて社会を変革しようとする実践は、変革対象である社会の構造に関する認識を必要とするが、実践がそうした認識の力を欠く場合、最終的には一貫した展望を持たない無責任なものになってしまう。そこで認識に際しては、常に実践を念頭に置き実践への熱意を持ち続け、変革に直接役立つ理論を提供することが、実践性を保証する誠実な態度だ、ということ。

問二十三　傍線部3「認識が、部分検査ではなくて、諸範疇のせめぎ合う「力の場」の解剖であり、そこに自らの実践性の保証が懸かった包括的なものであればある程、それは情熱やもろもろの「衝動」から切り離し難いものとなる」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　認識が、諸範疇のせめぎ合う「力の場」において、部分ではなく全体を規定する力を持った一つの根源的範疇を導出する、冷然たる思考の働きであればあるほど、その根源性は、「願い」「愛情」「不安」といった「衝動」の複合体に水源をもつので、両者は切り離せない、ということ。

ロ　認識が、専門的に分化した領域における実証的分析に従事するのではなく、相対峙する諸範疇の関係を徹底的に、包括的に考え抜こうとするものであればあるほど、その背後では、「願い」「愛情」「不安」といった「衝動」が認識の源泉として強く作用しているのであり、両者は切り離せない、ということ。

ハ　認識が、諸範疇のせめぎ合いの「力の場」における客観的で冷然たる思考の働きであったとしても、それが実践性を具備するものであればあるほど、対立しあう社会的利害のせめぎあいを解剖する内実を持たざるを得ず、「願い」「愛情」「不安」といった「衝動」を排除することはできない、ということ。

ニ　認識が、専門に特化した領域において検査を実施する場合であっても、それが全体を包み込むスケールを持つものであればあるほど、「願い」「愛情」「不安」といった「衝動」が強く作用し、一方における冷徹な客観的思考と、他方における情緒的な「衝動」が切り離し難い一体性を生み出す、ということ。

ホ　認識が、専門的に分化した領域における実証的検査に従事するのではなく、諸範疇のせめぎ合いの「力の場」において、すべての範疇間の対立を調整しようとする思考の働きであったとしても、思考の主体が人間である以上、「願い」「愛情」「不安」といった「衝動」から自由ではありえない、ということ。

問二十四　傍線部**4**「そこから認識を発生させ、そこにおいて認識の活動を生き生きと支えている縦の社会文化的根源が「歴史」なのである」の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ　認識活動の根源にはその認識を行なう者の属する社会や文化があり、その社会や文化の中で培われてきた思考法によって「衝動」が徐々に認識の地盤に変えられていったという意味で、認識は歴史的次元を伴っているということ。

ロ　認識活動の核には「衝動の地盤」があり、その「衝動の地盤」を言語化するものとして成立した思考法の伝統があり、その両者が結びついて文化となっていくだけに、そうした文化と切り離しえないという意味で、認識は歴史的次元を伴っているということ。

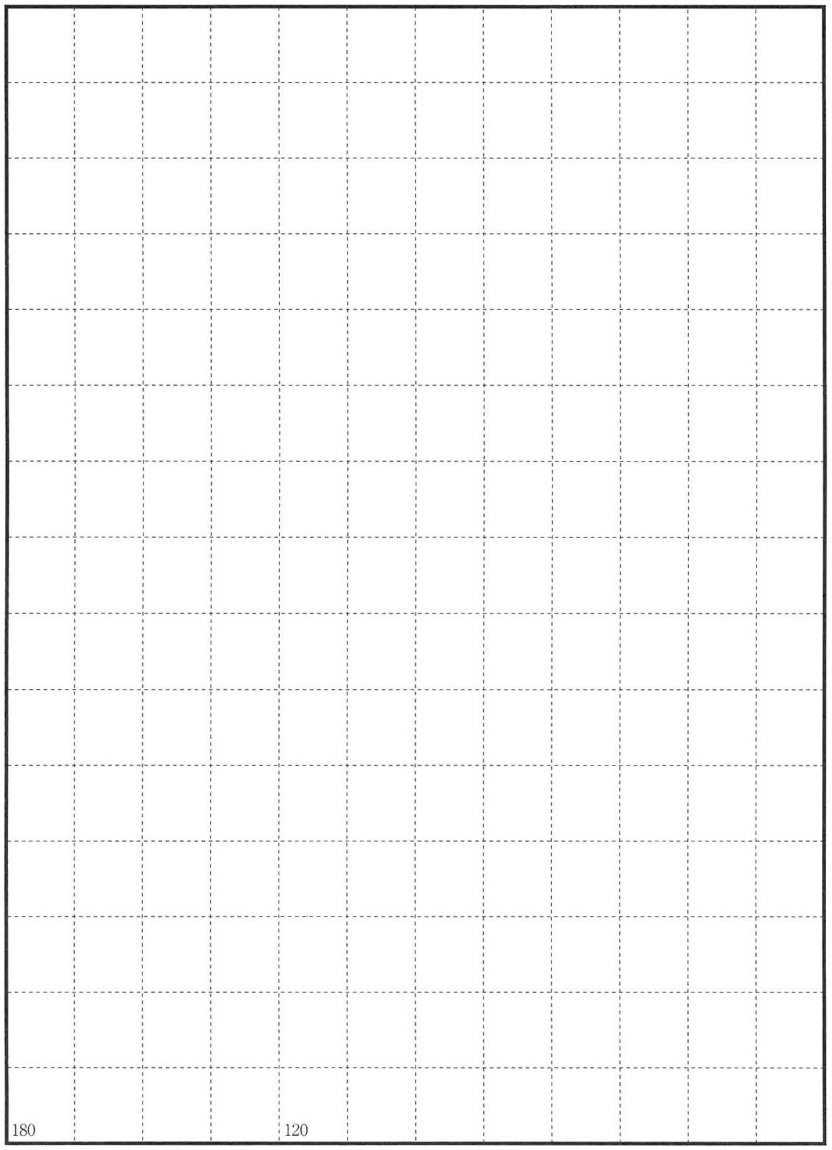
ハ　人間社会にはそれぞれの文化があり、そうした文化は「衝動」の母なる大地であるだけでなく、その社会の伝統的な思考を作り上げる以上、人間の行なう認識活動もそうした文化の枠組みを超えることはできないという意味で、認識は歴史的次元を伴っているということ。

ニ　人間社会においては、それぞれの社会の中で形成されてきた理論的伝統によって思考の基礎が築かれるが、さらにその社会に特有の文化において育まれる「衝動」があり、そうした「衝動」が認識活動の根本で働くという意味で、認識は歴史的次元を伴っているということ。

ホ　人間社会には「衝動」の母なる大地があり、それが文化として成り立つ中で認識活動も可能となり、言葉が生まれ、その社会に特有の思考法が醸成されてくる以上、そうした「衝動」や思考法に支えられているという意味で、認識は歴史的次元を伴っているということ。

問二十五　傍線部**5**「喪失感それ自体が却て認識すべき世界を深く拡大し、認識の活動を一層推し進める」とはどういうことか。筆者の考える「認識」と「実践」の関係に留意して、**一二〇字**以上**一八〇字**以内で説明せよ。（解答は記述解答用紙の**問二十五**の欄に楷書で記入すること。その際、句読点や括弧・記号などもそれぞれ一字分に数え、**必ず一マス用いること。**）

【下書き用マス目】（この下書きは回収しないので、解答は、**必ず解答用紙に記入すること。**）



〔以　下　余　白〕